

短 報

長野女子短期大学生活福祉専攻終了にあたって

長野女子短期大学

中山 和 子

要 旨

2003年の1期生から今春卒業を迎える2020年の18期生まで、介護福祉士を送り出してきた長野女子短期大学の生活福祉専攻がこの春で終了する。19年間に262名が入学し、244名の卒業生を輩出してきた。高齢社会の現代、介護士は益々必要とされるが、全国的に介護士を目指す学生が少ないことも事実である。専攻を終了するにあたり19年をまとめてみた。

介護の対象は高齢者のみではない。さまざまな障がいを抱えた子どもから高齢者まで幅広く、利用者である人間を理解することから始まる。必要とされる介護の役割は、その人の心身状況や生活環境など、複雑で、幅広い学びが必要となって来ている。

キーワード：介護の対象、教育内容、介護技術、コミュニケーション、介護実習

わが国の総人口は、国民衛生の動向によると2020（令和2）年10月1日現在、1億2,622万7千人とある。この内65歳以上の高齢者の割合（高齢化率）は28.8%で、昨年より約2%増えている。日本は世界的にみても有数の長寿国であることから、高齢問題は今後益々深刻で、高齢・障がいの専門職である介護福祉士は益々必要とされる。

本学が介護福祉士の養成を始めたのは2003（平成15）年4月で、生活科学科の中に“生活福祉専攻”を設置してからである。5年毎の高齢化率が17%から20%になった頃と一致する。

2003（平成15）年の1期生から2020（令和3）年の18期生まで、生活福祉専攻19年間に262名が入学し、その内244名が卒業した。卒業生の中には、他大学に編入（社会福祉・看護）した者、留年した者も8名いた。（表1 学生数の推移）

表1 学生数の推移

入学年度	人数	卒業人数	留年	退学
2003 (H15)	33	32	2	1
2004 (H16)	32	31		1
2005 (H17)	26	22	1	4
2006 (H18)	11	11		
2007 (H19)	11	10		1
2008 (H20)	6	5		1
2009 (H21)	14	12		2
2010 (H22)	23	22	2	1
2011 (H23)	19	18		1
2012 (H24)	9	9		
2013 (H25)	22	22		
2014 (H26)	10	10	1	
2015 (H27)	9	8		1
2016 (H28)	15	13	1	2
2017 (H29)	10	8		2
2018 (H30)	5	5	1	
2019 (H31・R1)	4	4		
2020 (R2)	3	2		1
2021 (R3)	0	0		
計	262	244	8	18

受容が高い介護現場であるが、対象である要介護高齢者・障がい者の状況が、近年複雑化している現状がある。脳血管疾患後遺症等の身体障害だけでなく、認知症やうつ病などの精神疾患、難病や慢性疾患など、合併症が対象の介護度をより難しくして、より質の高い介護を求められるようになってきてい

る。疾病をもつ利用者の理解の為に医学的知識も必要になり、福祉職だけでなく医療・精神（心理）・理学療法その他、地域における医療・看護等、多職種との連携が必要不可欠になって、学ぶ範囲や機会も増えている。

授業は、「介護技術」「社会福祉」「介護概論」の基礎的理解だけでなく、医学の基礎的理解のため「発達と老化の理解」「こころとからだのしくみ」「認知症の理解」「障害の理解」といった広い範囲で学び、専門職としての力を伸ばす内容に変化した。介護を学問的により深めるため、対象の人の理解が大切とされ、介護の目的・機能、介護展開過程を学ぶことが必要となった。「介護概論」「介護技術」「形態別介護技術」「介護過程」と、授業も年代と共に変化してきた。「介護過程」は「生活支援技術」や「介護総合演習」と共に、利用者の状況に応じた介護過程の実践的展開ができるように、時間を拡充して位置づけられ、「求められる介護福祉士像」の見直しも掲げられている。（表2 生活福祉専攻教育課程一覧）

2014（平成26）年から介護福祉士が“吸引”“経管栄養”といった医療的技術を実践することになり、「医療的ケア」の演習授業が開始された。担当教員は、当初、看護職としての経験が5年以上あり、“医療的ケア教員講習会”又は“痰吸引等の講習会”を受講した看護職が担当することになっていたが、現在では介護職も講習を受講して担当している。今回まとめるにあたり、授業を担当した教員について、2004（平成16）年度から2021（令和3）年度までの18年間の担当授業数を常勤・非常勤で確認した。（表3 雇用形態別担当授業数年度推移）常勤教員担当授業数380、非常勤教員担当授業数318、18年間に生活福祉専攻だけで、合計698の授業を先生方にご教授頂いた。一人の先生が複数教科を担当したこともあるが、実に多くの先生方にお世話になった。初期の頃の先生には著名な先生方も多く、開学するにあたり、当初は教員確保に相当苦労されたことであろうと推察する。建学の精神にもあるとおり、「配慮ある愛の実践」を掲げ、女子教育に力を入れ

表2 生活福祉専攻教育課程一覧

科目	授業科目 *印は選択科目、それ以外は必修科目
教養に関する教育科目 人間と社会 人間の理解 社会の理解 介護 介護の基本 コミュニケーション技術 生活支援技術 介護過程 介護実習 医療的ケア 医療的ケア ころとからだのしくみ 発達と老化 認知症の理解 障害の理解 ころとからだのしくみ 介護研究	信濃の風土と文化* 生活と音楽Ⅰ・Ⅱ 生活文化論(マナー教育)Ⅰ・Ⅱ 暮らしと法律* いのち学 基礎英語* 情報科学* 情報処理演習Ⅰ・Ⅱ スポーツと健康Ⅰ・Ⅱ 人間の尊厳と自立 人間関係とコミュニケーション* 社会保障制度論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(Ⅱ・Ⅲは*) 介護の基本Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(Ⅲは*) リハビリテーション論Ⅰ・Ⅱ(Ⅱは選*) アクティビティケアⅠ・Ⅱ(Ⅱは*) コミュニケ技術Ⅰ・Ⅱ(Ⅱは*) 家事支援 住環境 介護技術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(Ⅲ・Ⅳは*) 栄養・調理Ⅰ・Ⅱ 介護過程Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは*) 介護実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(Ⅲ・Ⅳは*) (基本研修)医療的ケアⅠ・Ⅱ-Ⅰ・Ⅱ-Ⅱ・Ⅲ-Ⅰ・Ⅲ-Ⅱ (医療的ケアⅠ以外はすべて*) 発達と老化の理解Ⅰ・Ⅱ(Ⅱは*) 認知症の理解Ⅰ・Ⅱ(Ⅱは*) 障害の理解Ⅰ・Ⅱ(Ⅱは*) ころとからだのしくみⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(Ⅰ以外は*) 介護研究

たお陰様で、学生たちは素晴らしい教育を受ける環境に恵まれているのである。

介護技術の授業は演習が基本である。それも時代とともに変化している。介護の現場で使用される介護用品にもIT機器等が参入し、便利な反面、より複雑になって現場では戸惑いも聞かれる。新しい機器ばかりに頼るのではなく、介護技術の基本に立ち戻り、利用者本位で、しっかり使いこなす勉強会等を実践している現場の話を「日本介護福祉学会」等で耳にすると、「介護の力」の頼もしさを痛感する。「介護は“人”を相手にする専門職なのだ」と基本に立ち戻る介護職が、まだまだ多いと思われてホッとしたのを覚えている。

それでも新しいことを学ぶ機会は大切である。東京で開催されていた「国際福祉機器展」に、本学の

表3 雇用形態別担当授業数年度推移

年 度	常 勤 教 員 担当授業数	非 常 勤 教 員 担当授業数	計
2004 (H16)	13	27	40
2005 (H17)	22	16	38
2006 (H18)	22	15	37
2007 (H19)	21	15	36
2008 (H20)	24	16	40
2009 (H21)	25	15	40
2010 (H22)	26	17	43
2011 (H23)	22	19	41
2012 (H24)	22	20	42
2013 (H25)	22	19	41
2014 (H26)	23	16	39
2015 (H27)	20	22	42
2016 (H28)	25	19	44
2017 (H29)	24	18	42
2018 (H30)	22	19	41
2019 (R1)	17	19	36
2020 (R2)	19	20	39
2021 (R3)注	11	6	17
計	380	318	698

注 2021 (R3) は、2年次の授業のみ

学生を連れて行ったのは2008年が最初である。長野大学の社会福祉学部の学生（1年生全員）が研修に行くのを聞いて、本学でもさっそく取り入れた。学生のうちに、最先端の福祉機器を知っておくことは、将来現場で役に立つと考えたからである。介護の基本を学んだ2年生を対象に研修を計画した。当時、本学の学生は単身で東京に行く事が珍しい時代であった。親御さんの了解を取り、旅行業者の添乗員・バスの乗務員、引率は担任を含めて1～2名、学生は多い時で22～24名。当初は、大型バス（人数減の時は小型バス）で長野駅発・着で出かけたのを記憶している。引率の担任の影響もあったが、まもなく新幹線・地下鉄等を乗り継いで行くように変更になった。グループで会場内を見学し、都会的なホテルに一泊することを、学生たちの代表が旅行業者と相談して決める。学生たちにとって緊張もあるだろうが、楽しい学びになったと思う。将来、「一人でも積極的に都会で学んでくる」という学生に育ってほしかったからである。最近では当たり前の“一人で都会へ”がまだ珍しい時代であった。学会や研修会等、学ぶ機会は色々ある。何をどう学ぶか、自分で決断できる介護職に育っていくことを期待している。毎年実施している福祉機器展研修には、その後も時々卒業生の参加があり、往復の列車と宿泊先だけ現役学生と一緒に、会場内は別行動でというスタンスで学んでいるようであった。就職してから福祉機器展を見学することが、また新たな学びになると実感できているからだと思われる。

コロナ感染拡大により2020年は「国際福祉機器展」が中止となり、2021年はウェブサイトによる開催となった。しかし、教員の尽力により2021年日帰りではあるが、長野県上田市の信州大学発ベンチャーのAssistMotion（アシストモーション）で、歩行トレーニングロボット「クララ」を体験学習できる機会を得た。学生と一緒に研修に参加し、製作者から直接丁寧な解説と、機器を装着して歩行訓練を体験できた。実際に福祉機器展に行くと、長蛇の列で体験は非常に難しいのである。健常者である私たちが機器（腰にPCの端末器、大腿骨外側と膝関節に補

助具）を装着して歩行しても、特に抵抗や違和感を感じることはない。しかし、障害がある場合は、その部位をPCが検索し、末端器を通して補助力がかかり、歩行する際に関節に力が入りやすくなるという装置である。機器は、大きさも重さもとても軽量である。開発者の説明では、さらに小型化を目指しているとのことである。開発に力を入れている中小企業の熱心な話を聞いて、「福祉機器の将来は明るい」と思った。

介護教員として学生指導に関わる中、最近の学生のコミュニケーション力の乏しさに驚くことが多い。一般学生ではなく介護を目指す学生である。入学前に対人援助の仕事をしは理解しているものと思っていたが、介護実習に出て、初めて障害高齢者の方たちと接するとき、「何をどう話しているのかわからない」「挨拶の後の会話が続きづかった」という声や、施設の実習指導者からは「友達ことば」「小さい声」「人前できちんと喋れない」ということをよく耳にした。知的障害者施設実習では尚更である。学生時代にいろいろな人と関わる経験を積むことは、大事な学びであると考えられる。介護現場の対象は、近年特に複雑で、一人ひとりの個性も含め、頭で考えるより体で、感覚で理解することが大切である。障害者施設では、身体・精神障がいの方の高齢化が深刻で、福祉を学んだ介護職が求められている。本来、知的障害者施設では、入所が“18歳未満の子ども”という設定から、保育士が多く働いている。しかし、医療や福祉の発展に伴い施設の高齢化が進み、保育士より介護職の受容が高くなってきている。利用者の理解のためにはコミュニケーションは欠かせない。しかし、そのコミュニケーションの苦手な学生は毎年いる。そのため、コミュニケーション力を高めるための研修会を企画・実施した。当初、長野県の補助金事業を活用し、2009年から2012年まで4年間「キャリアアップ支援研修会“コミュニケーション力をアップしよう！”」というタイトルで実施した。又、2015年から2017年の3年間「こみゅにけ教室」と題して、対象を中高生まで広げ、「介護人材確保のためのPR活動」の一環も含めて開催した。地域

住民の他、高校生、高校の教員、障害者・介護施設の職員も参加され、反響の大きさに改めてコミュニケーション力に自信のない人が多いと実感した。

長野女子短期大学での介護福祉士養成課程の生活福祉専攻は、2021（令和3）年3月卒業の2名をもって終了となる。2名は「介護福祉士」として介護施設に就職予定である。18年間の244名の卒業生と共に、これからの介護の現場を支えてくれる頼もしい人材に育っている。入学当初は頼りなげな学生であったが、1年次から一般教養科目と専門科目を、毎日たくさん受講し学んだ。4月中旬には介護実習が始まるなど、本当に忙しく時間に追われる中で、少しずつたくましさを身につけてきた。

本学の介護実習は、1年生の初期から7回にわたり、2日から20日間まで2年間で57日間（456時間）実施している。実習先の施設には“実習指導者”を配置し、毎年4月に指導者研修を実施して教員と共通の視点で学生指導ができるように配慮している。介護実習の時間が多く、2年次はほとんど施設実習に出ていくため、基本学習を1年次にほとんど終わらせる必要がある。毎年のことであるが、教員も学生と同様に施設に出ていくため、科目の教授とその準備の他、実習の準備・指導等に追われる。実習中は「実習巡回」の計画に沿って、教員は実習施設に赴き、学生指導に当たる。この「巡回指導」は、学生の実習への取り組みや実習先との調整など、限られた時間で面談するのである。時には不安に押しつぶされそうな学生の気持ちに寄り添い、ゆっくり時間をかけて、少しでも前向きに取り組めるように面談する。指導者に了解を得た上での、学内ではない個別面談の場である。時間も施設の迷惑にならないよう配慮が必要となる。

専攻が終了するにあたり、最初にも述べたが、介護は益々必要とされる分野である。時代に合わせて進化を遂げ、変化していくことを求められる。長野女子短期大学生生活福祉専攻の卒業生が、本学で学んだ知識と技術と周囲への“配慮ある愛の実践”を基に、一人ひとりが持てる力を発揮して活躍されることを、そして、これからも介護の現場をしっかりと支

えていってくれることを期待している。

参考・引用文献

1. 国民衛生の動向
2. 長野女子短期大学 「授業概要」2005年～
3. “ ” 「学生便覧」2005年～

